

京鹿子

4月号

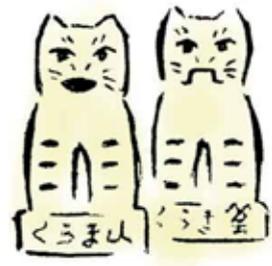
梅雨鏡
丸山佳子

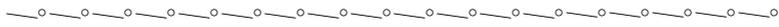
美の極み 拝し洗眼 ひな納め

紅椿岩を枕にあなかしこ

初つばめどの窓からも万倍日

木の芽道わたし追ひ越す脚美人





長女の
み使へる
言葉
彼岸寺

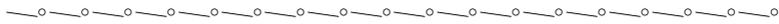
何見ても
喰みても
彼岸
おかげさま

松の
芯城址の
鳩よ
品に
走す

夏み
かん口
止されて
木に
一個

謹し
みて
冬將軍に
さようなら

そろ
そろと
自己を見
直そ
梅雨鏡



豊田 都峰
漣響集 その八

猫柳 日ごと 日しづく 太らせて
ねこやなぎ野の 灯心のごとくなり
ねこやなぎ遠嶺と ただ今交信中
水面には 日の粒は ねて猫柳
末黒野に 生まれせ かさる雲白し
起伏して 末黒野の 溜む雲の音



末黒野は風の気ままの伸び細り
矢印は雲指し魚は氷に上る
空音でも初音としたき日のこぼれ
雲ひとつ遠茜して道真忌
東風わたる雲のひとつを光らせて
オリオン座三時の方の沖を航く
沖おぼろ六点钟の灯かひとつ
左舷灯かかげて春月の沖

秀華採集

餅花や天満の寄席の繁昌す

森 茉莉

同じ正月でも、この場合は絶対と言ってよいほどの「餅花」を取り合わせたのがよい。明るく笑いも満ちる。

存問の煙ひとすぢ山眠る

山 中 志津子

遺髪塚しばしとどめむ冬日射

大 西 逸 子

前句の上中句は眠ってはいるが、山の心がなにか代弁されている感じ。けつして芯から眠ってはいないといったところ。後句の、遣徳の少しでも長く留まっしてほしいという、祈りの心が出ている。ともに対象への思い入れがある。

鈴鹿 仁

残り鴨

しばらくは春の湖国の風となり

残り鴨北を恋せば湖やさし

春雨の一枝に伝ふ玉の黙

啓蟄の雲がうながす野の辺り

道楽のみづうみ遊び通し鴨

近 詠

和田 照海

野風呂岬

安芸よりも伊予の山巔初景色

飛島海道だるま初日となる極み

初風の灘ほがらかに野風呂岬

あらたまの野風呂岬の端正に

御手洗は瀬戸のへそ島初御空



神麓集

花万朵 京都五山の文学も
 養花天京の碩学輪番僧
 以酌庵輪番僧も春の昼
 丈山も惺窩に学び風光る
 洛北に春の水汲む詩仙堂

林 日 圓

吊さねば海を吐くかも巨鯰鯨
 男とは死ぬまで道化十二月
 隙間風百年の家知り尽し
 小指嚙むほどのあきらめ年の暮
 冬帽は淋しい男にしてしまふ

松 田 都 青

病室に何もせぬ癖年の暮
 病窓より数へ日の街眺めをり
 医療器の検査續きに街師走
 十二月八日MRI検査に身を委ね
 MRI検査につつまる師走かな

北 村 香 朗

申し子の嬉々とうぶ声初閻魔
 蜜柑の種嚙むで戦時の景浮かぶ
 炊煙に淡雪ふれもせで積る
 礼参り宮居の奥の初音聞く
 しんかんと日の歌流れ路の臺

禰 寝 瓶 史

煮ゆるほじめでたき色香小豆粥
 末社まで吉のつづきて初みくじ
 松過ぎの佛に灯す小さき燭
 飄々と淡々として吉春の座
 初夢に尉斗くわへくる千羽鶴

吉 書 の 座 藤 岡 紫 水

鳩が来て昨夜撒きし豆ついでめる
 目つむりて風聞いてある二月の夜
 初音聞く朝の厨の明るくて
 東風に髪なびかせながら児等馳くる
 わが庭の小さきながら芝を焼く

船 越 美 喜



神麓集

弓始 伊藤 希 眸
 お飾は神の依代玉砂利踏む
 お年玉神の子なりと申し受く
 神苑を出てひいふうみい福寿草
 若水を神の目避けて鴉呑む
 神事いま無言ではしる弓始

腕枕 丸井 巴 水

大寒の真つ赤な闇の底で寝る
 額縁のなき絵を飾り春の窓
 たんぽぽが少女のこゑで呼んでゐる
 春の雲野に一本の腕枕
 蝌蚪の泡鯉が吸い込む座禅石

去年今年 川崎 光 一 郎

パンドラの箱の戒め去年今年
 永らへて婦唱夫随や宝船
 豪雪や日本列島ちぢこまる
 団欒の真ん中に在る囲炉裏かな
 汚濁の世見て見ぬ振りに山眠る

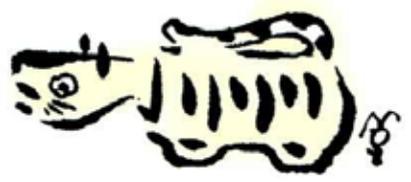
餅ひとつ 荻野 千 枝
 ははその母の悌た浮く松飾り
 独り祝ぐ小餅一つで足る雑煮
 並々と生きて雑煮の餅ひとつ
 長寿橋初杖曳けば神の裾
 風邪の目にうつる畳目数知れず

凍雲 松本 鷹 根

定位置に葉牡丹飾り門を掃く
 初御空一羽たちゆく遠茜
 光芒の凍雲黄金で縁取りす
 泥色に鯉を沈めて野川寒む
 寒の施肥孤独撒きゆく歩みなり

小堀 寛

くろがねの宙そら毀ちけり初日の出
 火の酒の唇二枚うつくしや
 ほうほうのていの字忘れ去年今年
 青の時代に止めさす年男
 鷺の王大計を秘む大旦



京鹿子集

豊田都峰選

櫛や形見の小袖こむらさき

枚方 森 菜明

南座へ急ぐ袂や都鳥

京都 大西 逸子

梟の闇の深みへ寝落ちけり

枯滝やのんどひりひり痛みだす

餅花や天満の寄席の繁昌す

枯菊の影も枯れゆく風のなか

はつはるやきづなしがらみほのぼのと

遺髪塚しばしとどめむ冬日射

不揃ひのうからの数の雑煮椀

黄落や搦手門のきしみ閉づ

存問の煙ひとすぢ山眠る

京田辺 山中志津子

年女二人三人厄払ひ

渋川 東 秋茄子

郷土史の埋草として冬すみれ

年女五黄の寅と年迎へ

山茶花忌名優の歌口ずさみ

賀状の束疎遠の友は尚うれし

屈託の煮詰つてゐる冬夜霧

友の賞日々の研鑽実万両

転生の迷路灯せり寒牡丹

年玉は手伝ひご褒美と祖母の手